修士論文（要旨）
2019 年 1 月

地域在住高齢者の社会的孤立の関連要因

指導　芳賀　博　教授

老年学研究科
老年学専攻
217J6001
岸本　明子

Master's Thesis (Abstract)
January 2019

Factors Related to Social Isolation of the Elderly Living in the Community

Akiko Kishimoto
217J6001
Master's Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hiroshi Haga

目次

序章.....1
第１章： 社会的孤立を取り巻く諸問題.....1
　1　社会的孤立の政策.....1
　2　高齢化と世帯形態の変化.....2
　3　人とのつながりの希薄化.....3
　4　ソーシャル・キャピタル 「地域の人への信頼」.....4
第２章　高齢者の社会的孤立の先行研究.....4
　1　文献検索の方法.....4
　2　文献による社会的孤立の概念と定義.....5
　3　社会的孤立に関連する要因.....6
　4　社会的孤立が健康に与える影響.....7
　5　社会的孤立の研究に関する課題.....8
第３章　高齢者の社会的孤立に関する実証研究.....8
　1　研究の目的.....8
　2　研究の対象と調査方法.....8
　3　分析方法.....11
　4　結果.....11
　5　考察.....12
　6　結論.....13

参考文献

1.　孤立の背景

1960 年後半から 1970 年にかけて都市の産業は,工業化へと大きく転換し,核家族を中心にした生活が普及していった.これによって,三世代家族が減少,世帯規模の縮小が広がった.その後,核家族世帯では,子どもの独立などよって、高齢者のみ世帯が増えるようになった.2009 年には,内閣府による高齢者の社会的孤立を把握するため「高齢者の生活実態に関する調査」が行われるようになった.人とのつながりが薄れて社会的孤立になるとして,2010 年に高齢社会政策によって,高齢者の「孤立」から「つながり」,そして「支え合い」が重要な課題として取り上げられるようになった.また,高齢者単身世帯や夫婦世帯が増え続ける中で,高齢者の社会的孤立と健康への影響が問題となってきた.日本の社会的孤立の割合は,OECD 加盟国の中でも 2 番目に高く、社会的孤立に陥りやすい状況にある.

2.　文献による社会的孤立の概念と定義

国内の文献から社会的孤立を同居以外の家族や親せき,　友人に対面で会う頻度と,非対面で,手紙,電話,メールなどで連絡する交流頻度で構成されている,斉藤らの定義が多く使用されていることが確認できた.

3.　研究の目的

地域に暮らす高齢者が社会的孤立に陥りやすい人にはどのよう特徴があるかを検討した.独立変数として先行研究で検証されてきた諸要因に加えて「地域への愛着」,「地域の人への信頼」を取り上げた.研究の意義として,高齢者が人とのつながりを維持して生活をしていくための方向性を探り保健,医療,福祉サービスの質的向上に貢献できるということがあげられる.

4.　研究の対象と調査方法

神奈川県綾瀬市における「高齢者の健康と生活に関する調査」の 2 次利用データを用いた.分析対象は綾瀬市に在住する 65 歳以上の高齢者 3058 人を対象に自記式質問紙による郵送調査(2017.7)で回収された 1,899 人で(回収率　62.1%)データに欠損がない 1,796 人とした.桜美林大学研究倫理委員会の審査の承認を受けた.

5.　研究方法

社会的孤立については先に示した斉藤らの基準に準拠して,家族・親族や友人と会ったり,話しをしたりすることが,月 1 回未満を「社会的孤立」として,操作的に定義した.独立変数は基本属性には,性別,年齢,世帯構成,居住期間,居住形態教育年数, 主観的経済状況,身体的側面には,転倒歴,主観的健康感,併存疾患,抑うつ(GDS5）,手段的日常生活動作(IADL), 要介護, 行動範囲,社会的側面には,地域への愛着,地域の人への信頼を取り上げた.

6.　分析方法

社会的孤立に関連している項目を選択するために,単変量解析(χ^2)を行った.基本属性,身体的側面,及び,社会的側面の中で,χ^2 検定にて社会的孤立と有意な関連のあった項目を独立変数,社会的孤立の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った.分析の前に

変数間の相関関係を調べるため,Spearman の相関係数を用いて検討をした.項目間の相関係数はすべて 0.5 未満であった.統計処理は IBM SPSS Statistics 25 を用い統計的有意水準は P<0.05 と設定した.

7.　結果

ロジスティック回帰分析基本属性の項目は男性で賃貸住宅に居住者が孤立に関連していた.身体的側面では併存疾患が有り,週 1 回以下の外出頻度が孤立に関連があった.社会的側面の項目は地域の人への信頼ができると思わない人が孤立に関連する要因として抽出された.

2 考察

性別は男性が孤立に影響があり先行研究を支持する結果であった病気が孤立に影響するのかは横断研究であり不明であるが,孤立と病気には相互作用の関係があると考えられる.外出頻度が週 1 回以下になることは,年齢による身体的機能の衰えや障害によって行動範囲が限られることによって,孤立する可能性がある.賃貸に居住している人は,経済階層が低いことが想定され孤立に影響している可能性がある.人への信頼が持てない人は,そのことが新たな社会関係の構築を妨げる要因になっている可能性があることが示唆された.

参考文献

阿部彩：包摂社会の中の社会的子孤立―他県からの移住者に注目して―. 社會科學研究, 65(1)：13-30 (2014).

綾瀬市 ：綾瀬市人口ビジョン～人口の現状と将来展望～.(2016). https://www.city.ayase.kanagawa.jp/ct/other000034500/jinkoubizyon.pdf (2018.6.30)

綾瀬市 ：平成 29 年度綾瀬市統計要覧.(2017). https://www.city.ayase.kanagawa.jp/hp/page000032900/hpg000032884.htm (2018.6.30)

新井清美, 榊原久孝 ：都市公営住宅における高齢者の低栄養と社会的孤立状態との関連. 日本公衆衛生雑誌, 62(8)：379-389 (2015).

A.H. マズロー 著, 小口忠彦 翻訳:人間性の心理学―モチベーションとパーソナリティ. 改訂新版, 産能大出版部, 東京(1987).

Boden-Albala, B., Litwak, E., Elkind, M. S., Rundek, T: Social isolation and outcomes post stroke. Neurology,: 64(11):1888–1892. (2005).

Carstensen L Laura: Social and emotional patterns in adulthood: support for socioemotional selectivity theory. 7(3):(1992).

Chatters M. Linda, Taylor Owen Harry, Emily J. Nicklett, Robert Joseph Taylor: Correlates of Objective Social Isolation from Family and Friends among Older Adults. Healthcare. Psychol Aging.6(1): (2018).

Cornwell York Erin and Waite J Linda: Social Disconnectedness, Perceived Isolation, and Health among Older Adults. J Health Soc Behav. 50(1): 31–48. (2009).

Cornwell York Erin, Waite J Linda: Measuring Social Isolation Among Older Adults Using Multiple Indicators From the NSHAP Study. J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci. 64B (Suppl 1): 38–46. (2009).

Crystal W.Cené, Laura Loehr , Feng-Chang Lin, Wizdom Powell Hammond: Social isolation, vital exhaustion, and incident heart failure.findings from the Atherosclerosis Risk in Communities Study. Eur J Heart. 14(7): 748–753. (2012).

Diego Zavaleta, Kim Samuel, China Mills: Shame, Humiliation and Social Isolation. Missing Dimensions of Poverty and Suffering Analysis. Oxford Poverty & Human Development Initiative (OPHI). working paper No.67: (2014).

江尻愛美, 河合恒, 藤原佳典, 他: 都市高齢者における社会的孤立の予測要因：前向きコホート研究.日本公衆衛生雑誌. 65（3）：125-133. (2018).

Fujiwara Yoshinori: Synergistic or independent impacts of low frequency of going outside the home and social isolation on functional decline: A 4-year prospective study of urban Japanese older adults. Geriatrics & Gerontology International.17（3）：500-508. (2017).

Giulia Cinzia, Spazzafumob Liana, Sirollab Cristina, Marie Angela: Social isolation risk factors in older hospitalized individuals., Archives of Gerontology and Geriatrics. 55 (3):580-585. (2012).